

# デザイナーのための経済コラム(70)

優柔不断か熟慮断行か、または拙速か巧遅か

「優柔不断」、「熟慮断行」、「拙速」、「巧遅」の四字熟語、二字熟語はいずれも語源は中国の古典にあります。飛鳥時代以降、幕末、明治期に欧米の文化、思想が入ってくるまでは政治、経済、教育、産業、軍事のリーダーにとっては思考の重要なキーワードの一部になっていたと考えます。また、思考し判断するためには経験や客観的な多様な情報が必要だったと思います。

「漢書」  
「史記」  
「孫子」

聖徳太子や弘法大師や偉人の伝説にはこのような思考や行動の知恵を伝承する狙いがあるのではと思います。また、町人、庶民の間では簡単な言葉で説明し、学習しようとしたのがことわざや「いろはかるた」であったと思います。

「聖徳太子は一度に10人の話を聞いた。」(多様な情報の収集)

「弘法も筆の誤り」(巧遅よりも拙速を)

「論より証拠」「念には念を」(熟慮断行)

「下手の考え休むに似たり」(優柔不断)

東西冷戦の時代からアメリカの国防総省では世界の状況をVUCAと定義しました。この考え方は軍事だけでなく、世界の多様な分野でも使われるようになっていきます。VUCAの考え方も「いろはかるた」にありました。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」(変動性)

「一寸先は闇」(不確実性)

「風が吹けば桶屋が儲かる」(複雑性)

「京の夢大阪の夢」(曖昧性)

Volatility (変動性)  
Uncertainty (不確実性)  
Complexity (複雑性)  
Ambiguity (曖昧性)

VUCAとは

<https://www.nri.com/jp/knowledge/glossary/vuca.html>

VUCAは現実の認識について説明していますが、認識にもとづきどのように考え、行動したら良いかについて、欧米では少し前にあった詩人の手紙の中にあった考え方を精神科医が掘り出し、新たな発想法にブラッシュアップしています。

「私はディルクさんにさまざまなテーマで論争ではないが長い説明をした。私の心の中で数多くのことがぴたりと符合しハッとしました。特に文学において、人に偉業を成し遂げしむるもの、シェイクスピアが桁外れに有していたもの——それがネガティブ・ケイパビリティ、短気に事実や理由を求めることなく、不確かさや、不可解なことや、疑惑ある状態の中に人が留まることが出来る時に見出されるものである。」(英国・ジョン・キース:1795～1821)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ネガティブ・ケイパビリティ>

それはネガティブ・ケイパビリティ・negative capability と呼ばれ、「消極的能力」、「消極的受容力」、「否定的能力」、「不確実性耐性」と訳されています。

<https://www.persol-group.co.jp/service/business/article/20941/>

「即決即断」、「拙速」がビジネスでは尊重され、「優柔不断」、「巧遅」は価値が低いように思われているように思いますが、VUCAの世界では逆に効力を発揮するように思います。それはビジネスではAIが効率的で、アナログは非効率と単純に決めつけられないのと同じことかと考えます。

ネガティブ・ケイパビリティの思想の原型は古代中国の「老子」ではないかと思います。孔子の「儒教(論語)」は体制側の権威主義、大国覇権主義、政権与党的、独善的、人間中心主義、その正当性を維持、誇示するための思考であるのに対して、老子の「道教(老子道德経)」は体制側への懐疑主義として、反権威主義、反大国覇権主義、自然中心主義、そして「曖昧さの寛容な受容」だと思っています。

日本に漢字が渡来してきた時、四書五経と同時に「老子道德経」もあったのでは推測します。「曖昧さの寛容な受容」が、日本に多様な宗教、多様な文字体系、多様な文化などを育んだのでないかと推測します。また、現代の「老子」の研究の多さ、多様さにも驚きます。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/老子>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/老子道德経>

「曖昧の寛容な受容」を許せば、何でもありか？と思ってしまいます。しかし、それこそがAIにはできない、人間だからこそできる矛盾かも知れません。

(T.K.)



参考図書



老子画像

四書五経  
論語、大学、中庸、孟子  
易経、書経、詩経  
礼記、春秋